

※サンプルを参照して以下に記入いただき、完成後にメールの添付ファイルで学科等の FD 委員に送信してください。

報告者 高村元章（健康科学部 リハビリテーション学科）
氏名

FD 名称 第 13 回 FD 研修会「ディープ・アクティブラーニングの考え方と方法」

主催 東北学院大学 FD 推進委員会

開催日 2015 年 7 月 30 日（木）15：00～17：00
時

開催場 東北学院大学土樋キャンパス 5 号館第 1・第 2 会議室
所

講師 松下 佳代 先生（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

FD 内容 「京都大学の学習が単にアクティブであるだけでなく、ディープでもあるべきである」という提言のもとに、主に以下の 3 つの論点よりディープ・アクティブラーニング（DAL）の考え方と方法が講義形式で紹介された。

- * 学習：松下先生は意図的に「学修」ではなく「学習」の表現を使用されていた。
 - * ディープ・アクティブラーニング（DAL）とは、
学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時に、これからの自分の人生につなげていけるような学習。
1. なぜ、学習はアクティブであるだけでなく、ディープでもなければならないのか？
 - アクティブラーニング（AL）によってもたらされた新たな問題とその克服のためにも DAL の考え方と方法の導入が必要となった
 - 新たな問題：知識と活動の乖離、フリーライダーの出現、グループワークの非活性化など
 2. 「ディープ」であるとはどういうことか？
 - 「深い学習（学習への深いアプローチ）」 「深い理解」 「深い関与」 の「深さ」の 3 つの系譜の視点が重要との認識。
 3. それによって、AL はどう違ってくるのだろうか？
 - すぐれた AL の実践には含まれているが、現在の AL の理論では切り捨てられがちな面を
組み込むこと（例：指定文献を読んでから AL 活動、各自考えてからディスカッションの実施など）
 - 学習活動の構造（活動システム）とプロセス（学習サイクル）
 - 内化（知識の獲得）と外化（話す・書くなど）、知識の習得と知識を用いた高次の思考の両立
 - 授業でも、カリキュラムでも学習を捉える

※参考（第 84 回京都大学高等教育研究開発推進センター公開研究会「ピア・インストラクションによるアクティブラーニングの深化」での松下先生の講義が京大 OCW で公開されています）

松下佳代 「アクティブで深い学びのための仕組み」

<https://www.youtube.com/watch?v=1Wnm2ulqGyI>

<http://talkminer.com/viewtalk.jsp?videoid=1Wnm2ulqGyI&q=&row=1&N=5#.VcAzeWwVjIU>

報告書 これまで、AL は学習の形態や授業改善のための手法というイメージで自らの授業にも取り込
コメン んできたつもりであったが、AL の本来のねらいである学生中心の学びを実現するためには、さ
ト らに「学習の質・内容」という視点にも配慮することが重要であることを学んだ。特に「深さ」
（感想 に関する 3 つの系譜、学習活動の構造、学習活動のプロセスなどの概念は大変参考になった。
含む） また、AL を授業内で実践するためには、下準備としての授業外学習の重要性を強く認識した。
単に単位制の実質化という観点からの授業外学習時間の確保ではなく、授業内で AL を効果的に
展開するのであれば、授業外での事前学習なくして、深いディスカッションなどは出来ないのだ
と感じた。さらに、DAL を実践するためには、1 回の授業のみならず、半期の授業科目、4 年間
の学士課程プログラム、各専門コースの多様性なども幅広く考慮して、調整・検討していく必要
性も感じた。

報告日：2015 年 8 月 4 日